

図書館の窓

東京大学附属図書館報
Vol.42 No.6 2003.12

6

PDF 版 : <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/kanpo/>

目 次

図書館情報学と大学図書館(ぶっくぼすと No.9)	大学院教育学研究科教授 根本彰	89
柏図書館(仮称)の新たなサービスと準備について	附属図書館情報管理課	91
海洋研究所図書室資料紹介(学内所蔵特殊コレクションシリーズ No.16)	海洋研究所図書室	92
東京大学で利用できる電子ジャーナルについて - 第3回 電子ジャーナルをめぐる現状と将来 -	附属図書館情報管理課資料契約掛	95
データベース Lexis.com のご紹介	法学部附属外国法文献センター助手 染谷雅幸・石川優佳	98
図書館(室)ニュース		101
遡及入力平成14年度実績報告及び平成15年度計画	附属図書館情報管理課	102
1月~3月のデータベース定期講習会のお知らせ	情報基盤センター学術情報リテラシー掛	103
PDF版『図書館の窓』の公開について	附属図書館報編集委員会	104

ぶっくぼすと No.9

図書館情報学と大学図書館

大学院教育学研究科教授 根本 彰

図書館情報学とは

図書館情報学を専門にしていますという、何をやる分野ですかと必ず聞かれる。「図書館」と「情報」と「学」が頭のなかでうまく結びつかないらしい。昔、図書館学と呼ばれていましたというと「あれですか。東大にも図書館学があったとは知らなかった」とおっしゃる年配の方もいる。図書館学という名称がいかにも安直に聞こえ、アカデミズムと一線を画するものと見なされていたことは確かである。

教育学部に図書館学講座ができたのは1953年(昭和28)である。1950年にできた図書館法の規定により司書の養成を大学で行うことになったので、文部省が東京大学にこれに関わる研究教育の拠点として講

座の設置を打診した。実は当初文学部に対して打診があったが、当時の文学部教授会では図書館は学問の手段であっても対象とはならないという議論をして断ったため、できて間もない教育学部に設置されることになったと聞いている。その後、紆余曲折を経て現在は教育学研究科の生涯教育計画コースのなかに位置づけられている。

学問の手段であるから大学で扱わないという理屈は今や通用しない。というのは、多くの学問において、その対象と手段を区別することはもはやできなくなっているからである。図書館は教会や王室の書籍の組織的運営から出発し、手法的にも書誌学に関わりがあるので人文学的なルーツをもつが、伝統的な目録や分類、索引や書誌作成

のノウハウは本質的に情報技術と言えるものである。これが、最近では言語処理技術やデータベース構築技術などを加えて、ますます「知」の組織化を工学的ないし人文社会科学的に探る分野に近づいている。本学にも情報やメディアを教育研究の対象としている部門は複数あるから状況は大きく変化している。むしろ問題なのは欧米の大学と比べて、図書館という知の組織化の仕組み自体が大学の教育研究機構のなかでうまく生かされていないように見受けられる点である。

学びの世界と図書館

戦後の最初の教育改革において、学習者がみずから学ぶものを選んで主体的な学習を行うことを重視する考え方があった。教科書を訓古学的に拳拳服膺するのではなく、みずから学ぶための教材や資料を用意した学習環境をつくるのが大事だというものである。その考え方においては、図書館はカリキュラムをより発展させて、学問や知識の世界と教育現場とを結びつける役割を果たす場として位置づけられた。

1953年に「学校図書館法」という法律がつくられた。これは単に学校に図書館を設置するというだけでなく、図書館が教材や資料をふんだんに用いる学習を展開する機能をもった重要な場であるという考えに基づいていた。図書館には司書教諭という専門の教員がいてその媒介役を務めることになっていた。だがその配置はほとんど進まなかった。

これはその後教育が経済成長の手段としてとらえられたために、学習指導要領と検定教科書を組み合わせることで、学ぶ内容が厳密に定義されたことによるものである。子どもたちが自分の学習意欲を図書館資料の探索によって満たすという実践は、通常の学校の学習課程では基礎的な学習事項の習得を重視するために定着しなかった。そ

れが、新しい学習指導要領において総合的な学習の時間が取り入れられるなど、教育方法、教育課程の変化があったために、本年4月に司書教諭の配置が義務化されることになった。図書館をうまく利用する教育方法が定着するために50年という年月が必要であった。

大学の場合は？

だが、これは大学においても似たり寄ったりではなかったか。学生にレポートの課題を出すと、何冊か本を読んでまとめ参考文献をきちんと示すのはいい方で、ひどいになるとインターネットをサーチエンジンで検索しその記述をつぎはぎしておしまいというものまでいる。レポートは短くとも論文の一種であり、それなりの書き方のルールがあるはずだが、そのあたりのトレーニングができていない。

これを学生のせいにしてすませるわけにはいかないだろう。論文の書き方については教養学部の基礎演習で扱われているのかもしれないが、多くの場合、個々の学部、研究科、学科、コース、担当教官にゆだねられている。東大生は一般的に言って要領よく文章を書く技術に長けているので、そのまま社会に出てもあまり困らなかったのだろう。しかしあらゆる分野に知的創造性を要求される時代においてこれでは通用しない。

現在の大学設置基準において、1単位の学修を認定するのに、講義の場合、15時間分の教室における講義のほか30時間分の教室外での学習を行うことが要件となっている。教室外の学習にはもちろん教室で学んだことを復習したり、教室で出された課題をこなしたりすることが含まれるが、同時に、資料探索をしながらレポートを執筆したり、教室で学んだことをもとに自ら課題解決を行ったり、さらに発展させる読書を行ったりすることが含まれているはずで

ある。

そういう自主的な学習を支援する場として図書館がきわめて重要な役割を果たすことになることは言うまでもない。大学図書館には古今東西の書物を集められ、学習スペースとともに提供されているだけでなく、資料そのものが一定の分類体系のもとに秩序立てて配置され、また資料にアプローチするための目録や索引、書誌等のデータベースが用意されることで、自分で知の大海を泳ぐための道具立てが揃えられている。さらに、ライブラリアンはそうした知的世

界を歩むためのガイド役を積極的に果たす役割を担っている。近年は本学でも情報基盤センターで実施しているように、学生や教員が資料や情報を利用するための基礎知識を図書館員が教授する情報リテラシー教育の実践も試みられている。

このように、図書館には「知の宝庫」を120% 利用するための各種の仕掛けが用意されているわけである。学生・院生にはこれらを十二分に使いこなして、自らの学習を進めレポートや論文執筆に取りかかってほしいと節に願う次第である。

柏図書館（仮称）の新たなサービスと準備について

附属図書館情報管理課

附属図書館では、今年度末の竣工予定の柏図書館（仮称）の設立・運営準備を全館体制で行っています。

柏図書館は、建物は2階建て、総面積5,000㎡余りの規模です。資料の購入や受入、整理などは総合図書館において行う予定ですので、基本的にはサービスのみに特化して業務を行うことになっています。

柏図書館におけるサービスと運営の基本的なコンセプトは、(1)柏キャンパスで学ぶ約750名の新領域創成科学研究科の大学院生（修士・博士）に基本的な学習・情報サービスと施設・環境を提供すること、(2)自動化書庫導入による収容能力の飛躍的向上により、約100万冊の自然科学系バックナンバーを各部局図書館（室）から移管し、保存図書館機能を果たすとともに全学への文献デリバリーの拠点とすること、(3)柏キャンパス内のどの部局にも属さないキャンパスの中心的な図書館として、総合図書館、駒場図書館とともに附属図書館組織の大きな一翼を担うこと、(4)柏市等の地域との連携を重視すること、などです。

とりわけ、全学の図書館（室）の保存書庫機能については、長年必要性が叫ばれてきただけに柏図書館への自然系雑誌の移管に関しては、大きな期待が寄せられています。

自動化書庫への資料移管のため、附属図書館では、プロジェクトチームで作業を行っています。自動化書庫には当面自然科学系の製本済みの雑誌を移管することとし、年間約10万冊ずつ5年間作業をする予定にしています。現在は、初年度として医学図書館の保管する雑誌のうち8万冊、総合図書館が保管する雑誌のうち2万冊を移管対象として、作業を進めているところです。

来年度以降もこのような作業で移管を進めていきます。自動化書庫に収納が済んだ資料に関しては、デジタルデリバリー機能（e-DDS）を活用した文献複写サービスなども検討しています。これらのサービスにより、移管部局の書庫の保存機能を高めるとともに、迅速な学術情報の提供を実現する予定です。

学内所蔵特殊コレクションシリーズ No.16

海洋研究所図書室資料紹介

海洋研究所図書室

海洋研究所図書室には、地球科学、生物学関係の資料を中心に、図書 38,138 冊、雑誌 1,909 点が所蔵されています。今回はその中から、Challenger Report と世界測地系海図を紹介합니다。

1. Challenger Report (三井海洋生物学研究所寄贈)

Challenger Report とは

Edinburgh 大学博物学教授 Charles Wyville Thomson (1830 - 82) を隊長とし、通常は 3 本マストで帆走する、補助蒸気機関付きイギリス軍艦チャレンジャー 6 世号 (写真 1) が 1872 年から 76 年にかけて太平洋、大西洋、インド洋、南極海について行った海洋探検の成果を報告書として 1880 年から 95 年に刊行されたものです。



写真 1 チャレンジャー 6 世号



写真 2 チャレンジャー 6 世号による水深測量図

チャレンジャー 6 世号は、各地で水深測量を行いながら、それまで無生物帯と考えられていた深海から無数の新種生物を採集することに成功しました。

チャレンジャー 6 世号は、1875 (明治 7) 年 4 月 11 日から 6 月 16 日まで日本に寄航し、横須賀造船所で船体の補修や、相模湾 石廊崎 大島港 神戸 瀬戸内海 横浜を調査しています (写真 2)。

Challenger Report は総合図書館書庫 (請求番号 T000:159) にも所蔵されています。他に、国立科学博物館図書室、大型コレクションとして東京海洋大学附属図書館品川本館、鹿児島大学附属図書館で所蔵されています。

三井海洋生物学研究所とは

マサチューセッツ工科大学（MIT）で生物学を修めた三井高修（たかなが）氏が、下田市須崎に土地 15 万坪を求め別荘を建てると共に、約 1 050m² の鉄筋コンクリート平屋建てで、500m² の地下室をもった研究所を、敷地内浜辺に昭和 8 年 4 月に開設しました。

私設研究所でしたが、海洋生物学、地球物理学の研究所で、若い研究者の育成を主眼としたと考えられ、研究員、研究者には研究費・旅費・滞在費の、全額あるいは一部が研究所で負担されていました。

しかし、戦後の財閥解体で昭和 22 年頃にはほとんど活動を停止しました。その後、昭和 43 年に皇室の須崎御用邸敷地となりました。研究所建物は残したままなので、浜辺を散歩する皇族方がテレビで放映されると、背景に建物の一部が見える時があります。

昭和 40 年に海洋研究所内田清一郎教授の同級生の三井高孟（たかおさ）氏の口添えで、Challenger Report 50 冊は海洋研に寄贈され「三井海洋生物学研究所記念文庫」（写真 3）として保存されることになりました。

本の副標題紙に押されていた蔵書印からは、三井海洋生物学研究所、1932（設置年）SUSAKI（須崎）が読み取れます。図案化されたタカアシガニは、駿河湾の深い海底に生息しています（写真 4）。



写真 3 三井海洋生物学研究所記念文庫看板



写真 4 三井海洋生物学研究所蔵書印



写真 5 海図ロッカー

2. 世界測地系海図 (以下、海図という)

海図とは

海図には、船舶の航海の目標となる岬などの沿岸地形、灯台などの航路標識、水深、底質などが記載されています。陸上の地図と同じように世界海図、日本近海海図があり、海洋研には4,628枚所蔵されています(写真6)。

海洋研の2隻の研究船「白鳳丸、3,991t 研究海域：世界全域」、[淡青丸、606t 研究海域：日本近海]には海図が備え付けてあるので、研究船には貸出せず、陸上で研究航海の事前準備に使います。

日本周辺海域の海図は、海上保安庁水路部が作成、刊行しています。平成14年4月1日から緯度・経度の基準には、GPSシステムを使用した世界基準が用いられ、世界測地系海図になりました。

海図に興味をもたれた方は参考文献3に紹介した海上保安庁のHPもご覧下さい。

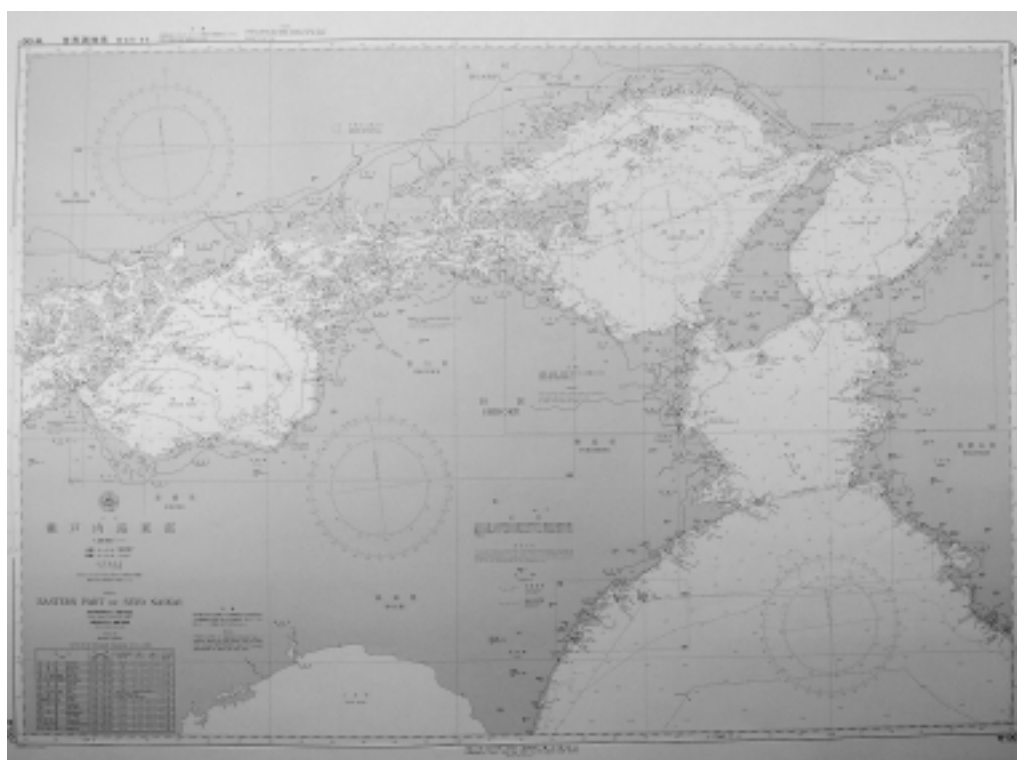


写真6 瀬戸内海東部海図 (76cm × 108cm)

海図書庫 (かいずしょこ)

中庭に2階建てプレハブ棟が新築され、1階部分を平成15年4月から「海図書庫」と名付け、比較的利用度の低い雑誌バックナンバーと海図を収納しています(前ページ写真5)。

参考文献

- 1 東京海洋大学附属図書館品川本館大型コレクション紹介
(<http://lib.tokyo-u-fish.ac.jp/library/collection/bunko.html>)
- 2 「地震」第2輯 Vol.40 (1987) pp.645 - 52 越川善明「三井地球物理研究所に就いて」
- 3 海上保安庁 (<http://www1.kaiho.mlit.go.jp>)

東京大学で利用できる電子ジャーナルについて

第3回 電子ジャーナルをめぐる現状と将来

附属図書館 情報管理課資料契約掛

本シリーズ第1回では、本学で電子ジャーナルを利用する際のツール、「東京大学で利用できる電子ジャーナル検索」(リンク集)の使い方などを紹介し(注1)、第2回では、リンク集の維持管理や、購読する電子ジャーナルの選定から実際に利用可能になるまでの過程についてお話ししました。

今回は、雑誌の価格高騰など学術情報の流通の問題と、全国の大学図書館が連携しての取り組み、また本学での取り組みについて述べ、日頃皆様が利用している電子ジャーナルをめぐる現状と将来について一緒にお考えいただければと思います。

1. 学術情報の流通をめぐる問題

大学における教育・研究には、学術情報の収集・整備が欠かせません。世界中の研究成果が掲載される外国雑誌はその代表例といえます。本来、学術研究の成果は広く公開して共有され、さらなる研究成果を生むというように、円滑に流通していくことが望ましい状態です。そのために大学図書館では雑誌をはじめとする学術情報の収集・提供に努めています。

ところが実際は、外国雑誌の市場は大手商業出版社による寡占が進み、1990年代以降、外国雑誌の価格は高騰を続けています。また、値上げに合わせて予算を大幅に増やすことができないため、日本国内での外国雑誌収集タイトル数は過去10年間で約40,000点から約20,000点へと大幅に減少しました。

一方、ここ数年で急速に電子ジャーナル化が進んでいます。電子ジャーナルは、論文入手の迅速性や検索の利便性ととともに、学内のどこからでも複数の人が同時に利用できるため、紙の雑誌のように学内で同じ雑誌を複数購入する必要が無く、より少ない経費で必要な雑誌を幅広く安定的に確保する点からも、

その導入は有効です。

しかし電子ジャーナルを刊行するのも同じ出版社であり、大手商業出版社による市場寡占、価格高騰という問題に変わりはありません。

この問題に対し、欧米やアジア諸国において、大学図書館が連携して出版社と価格交渉等を行う活動が進められています。日本においても、平成12年9月に東北大、千葉大、東大、名大、九大の図書館長5名をはじめとするメンバーにより「国立大学図書館協議会電子ジャーナル・タスクフォース」を立ち上げました。平成13年度以降メンバーを変えながら発展し、全国の国立大学附属図書館が連合体(コンソーシアム)を形成することで規模の大きさを生かし、より良い条件で電子ジャーナルを導入できるよう、多くの海外出版社と協議を重ねてきました。

これまでに、日本の大学の特殊事情について出版社の理解を得ることから始まり、利用可能タイトル数の拡充、団体割引のコンソーシアム価格、バックナンバーへのアクセス権、出版社からの利用統計データの提供などについて、タスクフォースでの協議の成果が各大学での購読契約に反映されています。

2. 本学でのこれまでの取り組み

本学では、電子ジャーナルの急激な普及と先述のような外国雑誌の価格高騰による購読タイトル数の減少という状況に対処するため、図書行政商議会の下でのサービス特別委員会において電子ジャーナルの積極的導入を検討し、平成12年4月から全学的に「電子ジャーナル導入実験」を開始しました。実験の対象として選定された電子ジャーナルの経費については、実験期間中は総長特別予算が措置されました。

この実験により電子ジャーナルの需要の高

さと有効性が実証されたため、引き続き電子ジャーナルが導入されることになりました。実験終了後の平成 15 年度からは、これら実験対象誌に加え、全学的導入の対象として選定された電子ジャーナルを導入し、経費は利用実績に応じて各部局で分担しています。

3. 今後の経費負担の仕組み

ここで、今後の経費負担の話に入る前に電子ジャーナルの価格の仕組みについて簡単にお話しします。

電子ジャーナルも紙の雑誌と同様、普通は 1 誌ごとに価格が付けられています。電子ジャーナルの刊行タイトル数が多い大手出版社等の場合は、全タイトルを一括して(あるいは分野ごとに)パッケージとし、パッケージ単位の価格で販売しています。これを本学ではパッケージ系電子ジャーナルと呼び、一方、1 誌ごとの価格で売られているものは、非パッケージ系と呼んでいます。

パッケージ系の場合の多くは、現在の冊子(紙の雑誌)の購読額を維持した上で追加料金を払うことにより、パッケージに含まれる電子ジャーナル全タイトルが見られるようになります。パッケージには本学で冊子を購入していないタイトルも含まれているため、1 誌あたりの単価を抑えて電子ジャーナルを幅広く導入できるという利点があります。

しかし冊子購読額の現状維持が前提条件となっているため、単純に冊子購読を中止してその分の経費で電子ジャーナルを購読するという訳にはいきません。また、冊子購読を中止すれば出版社はその分の利益を確保するため、電子ジャーナルの大幅な値上げをします。そのため、冊子購読を中止する部局が増えると、冊子経費を冊子購読部局が負担し、電子ジャーナル分を全学で分担するというこれまでの方式では対応しきれなくなります。

このため、本学では平成 16 年度から、以下のような新たな経費負担の仕組みを適用することになりました(平成 15 年 3 月の図書行政商議会にて了承済みです)。

A : 大手出版社(注2)のパッケージ系

- ・電子ジャーナル経費
全学共通図書予算化する
- ・冊子経費
冊子購読部局が 25% 負担

B : 非パッケージ系 (= 現状と同じ)

- ・電子ジャーナル経費
利用実績に応じて全学の部局で分担
- ・冊子経費
冊子購読部局が 100% 負担

上記 A の枠組みは電子ジャーナル経費をあらかじめ確保するために作られたもので、全学共通経費とするにあたって、14 年度の冊子購読総経費の 80% 相当額を、各部局の過去 3 年平均の冊子購入経費の割合で分担して財源とします。その代わりにこの枠組みに支障を来さない範囲内であれば、冊子を購読するか中止するかは部局の自由となります(B の非パッケージ系では冊子購読が学内で 1 誌もなくなると、当該電子ジャーナルの利用も中止となってしまいます)。

このほかに、特定の複数部局での共同購入や、1 部局での単独購入により、全学に提供しているケースもあります。

なお、電子ジャーナルの価格体系は未だ流動的であり、今後も価格の高騰が続くとすれば、従来の枠組みを大胆に見直し、また新たな方法を考えていかなければなりません。

4. 学術情報流通の将来像

電子ジャーナルは今日の学術研究に主要な役割を占めていますが、先述のように大手商業出版社の市場寡占により学術情報の円滑な流通が妨げられている問題があり、図書館にも研究者にも、大手出版社の販売戦略に盲従しない姿勢が求められます。研究者の研究成果である論文が商業出版社の管理下に置かれ、価格高騰のために入手できなくなっている、という現状に疑問を感じ、学術情報流通システムの根本的な改善に目を向ける必要があります。

学術情報の流通を大手出版社から取り戻す活動として、例えば大学内に蓄積された学位

論文や紀要などの様々な研究成果にメタデータを付与して公開・発信し、データベース化して利用効率を上げる事業が始まっています。この他にも従来から活用されているプレプリント・サーバ等があります。

また、自然科学分野では12%の世界シェアを誇る日本の優れた英文論文の80%が海外の雑誌に投稿される現状に危機感を抱き、日本から英文電子ジャーナルを発信し国際的な学術情報の流通をめざす「国際学術情報流通基盤整備事業 (SPARC/JAPAN)」が開始されました。これは欧米において創設された、大手商業出版社に対抗して学協会の出版活動を支援する組織である SPARC と連携しています(注3)。図書館としても今後、SPARC の活動に積極的に協力・連携していきます。

しかしなお、現行の SPARC 支援誌も根本的には、出版社の刊行する雑誌に論文を投稿しそれを購読するという点で、商業出版社の雑誌と同じシステムをもつ側面もあり、成功するかどうかは今後の展開如何によるところが大であると思われます。

一方、欧米では「機関リポジトリ」という新しい学術情報流通の形態が生まれています。「機関リポジトリ」とは、大学や研究機関の関係者が生み出す論文をオンラインで投稿できる公開書庫であり、学術出版の新たな試みです。

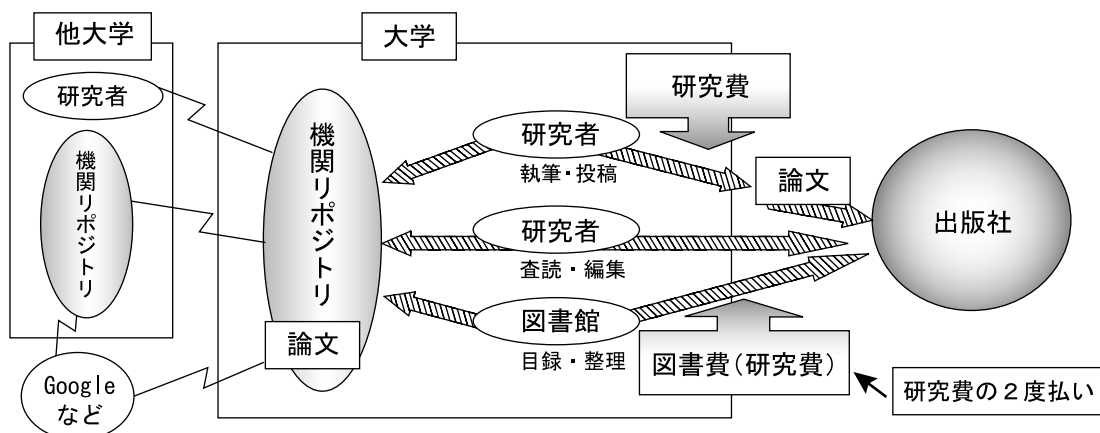
大学の研究者が論文を執筆し、編集委員と査読者が選定評価し、図書館が保存蓄積して提供するという学術出版サイクルのそれぞれの機能を考えると、出版社には直接的コストはほとんど掛かっていません。「機関リ

ポジトリ」は、これらの機能を分散し、各機能の引き受け手が協調することにより、新たなモデルを試みるものです。この「機関リポジトリ」では、研究成果をより広く流通させるため、無料で自由に利用でき(オープン・アクセス)検索エンジンなどからも発見できること(相互運用性)が求められています。

既存のメディアに拮抗するほどの権威を得て業績評価に適用できるようになるまでには、まだしばらく時間がかかるものと思われますが、「機関リポジトリ」は、研究成果の流通と知的所有権を大学研究者の手に取り戻し、学術出版の経済的破綻に対処し、さらに革新を続けるネットワーク技術を学術情報の流通全体に適用することにより、学術コミュニケーションの発展を促すための現実的な打開策として期待されています(注4)。

以上で本シリーズの連載を終わります。この連載が、電子ジャーナルを利用される皆様のお役に立ち、理解を深めていただく参考になれば幸いです。

- (注1) 再度ご紹介しておきます。
 - ・「東京大学で利用できる電子ジャーナル検索」
<http://ejournal.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>
 - ・電子ジャーナルに関する問い合わせ先
ejournal@lib.u-tokyo.ac.jp
- (注2) 16年度は以下の10出版社が対象です。
 Elsevier (Academic Press 含む), Wiley, Springer, Blackwell, Kluwer, Nature, IEEE, Karger, Oxford University Press, Taylor & Francis
- (注3) SPARC については、「図書館の窓」2003年10月号 vol.42(5)をご覧ください。
 (附属図書館ホームページにも掲載)
- (注4) 機関リポジトリの具体例としては、マサチューセッツ工科大学 (MIT) の DSpace (ディー・スペース) (<http://libraries.mit.edu/dspace-mit/index.html>) などがあります。



データベース Lexis.com のご紹介

法学部附属外国法文献センター助手 染谷 雅幸
石川 優佳

1. データベースの内容

Lexis.com は、米国の法律・判例・法律雑誌（ローレビュー）等を主たる情報内容とし、さらにイギリス・カナダ・オーストラリア等の法情報などをも収録する法律分野のオンライン・データベースです。これら法情報に加えて、さらに New York Times、Le Monde、Frankfurter Allgemeine Zeitung 等の世界の主要新聞や News Week 等の雑誌も収録されています。これらの情報のソースを、web ベースで提供されている画面をクリックしながら選択してゆき、その本文自体を入手することも可能となっています。法学部と情報基盤センターでは、2003 年 4 月 17 日より、Lexis.com のサービスを開始いたしました。

2. データベースへのアクセス方法

(1) GACoS からのアクセス

情報基盤センターの "GACoS: Gateway to Academic Contents System (<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/gacos/index.html>)" のメニューの「その他の事項を調べる」から「判例・法令」を選択し、Lexis.com を選択します。また " 東京大学で利用できるデータベース全リスト (<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/database/database-j.html>)" からのご利用いただけます。

(2) Lexis.com へのアクセス方法詳細

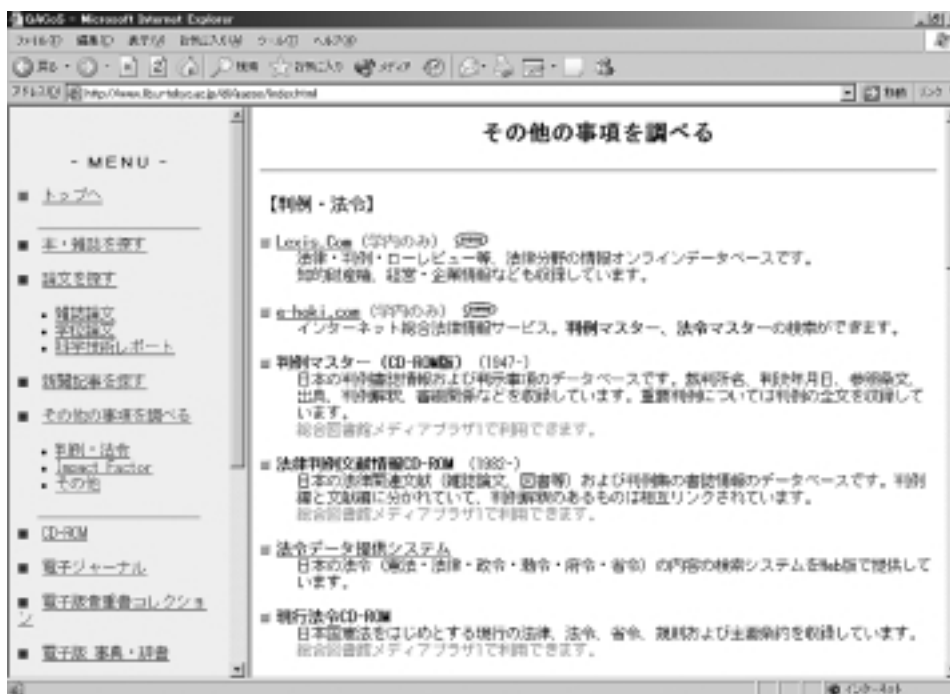
以下では GACoS: Gateway to Academic Contents System からアクセスする場合をご紹介します。

- i) 学内の端末から情報基盤センターの GACoS (<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/gacos/index.html>) にアクセスします。



ii) MENU の「その他の事項を調べる」から「判例・法令」を選択します。

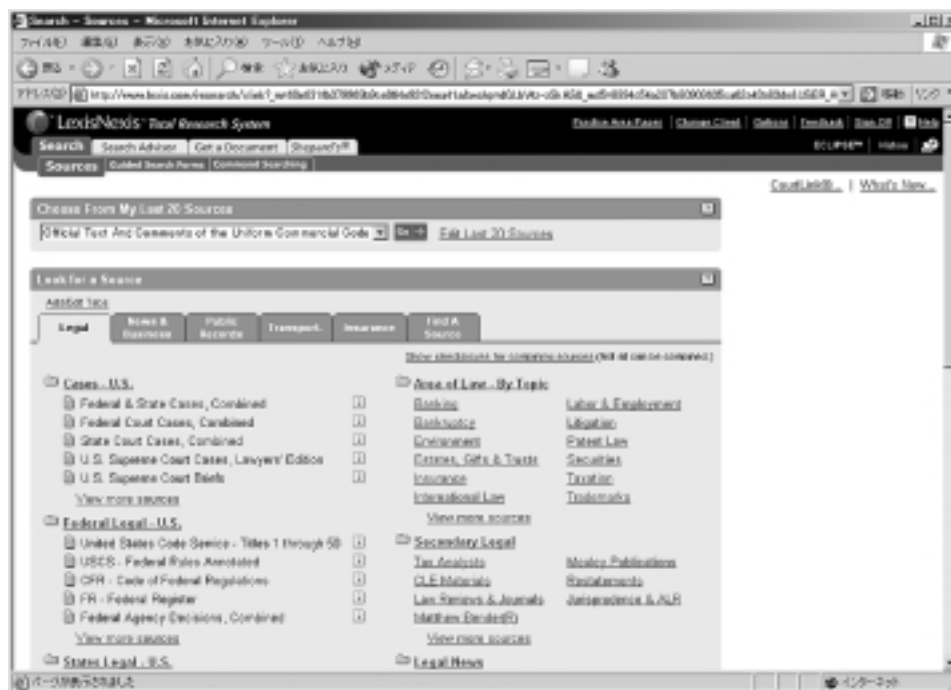
iii) 【判例・法令】の項目の中に、Lexis.Com (学内のみ) があるので、そこをクリックします。



iv) 「Lexis.Com へはここをクリック」という表示が現れるので、その部分をクリックします。



v) Lexis.com の初期画面が表示されます。この画面は法情報に関するページです。米国連邦判例・連邦法令・各州法律判例・各分野別法律・二次資料（ローレビューなど）等のファイルに分かれており、必要な部分をクリックします。



3. データベースのご利用方法（主な検索機能）

(1) まず法情報の検索に関して述べます。以下のような諸機能があります。

・ Search（キーワード検索）

Search Sources が選択されていることを確認した上で、法律・判例・ローレビュー等検索したいファイルを指定して、キーワード検索式を入力します。（検索式等については、後述 のオンライン・マニュアルをご参照下さい。）

・ Search Advisor（興味のある分野から検索）

ある特定の法律分野やトピックから検索ができる機能です。表示されたフォルダを選択していくことで、ご希望のソースにたどり着くことができます。Search Advisor が選択されていることを確認した上で、調べたいテーマをクリックして行って下さい。

・ Get a Document（サイテーションより検索）

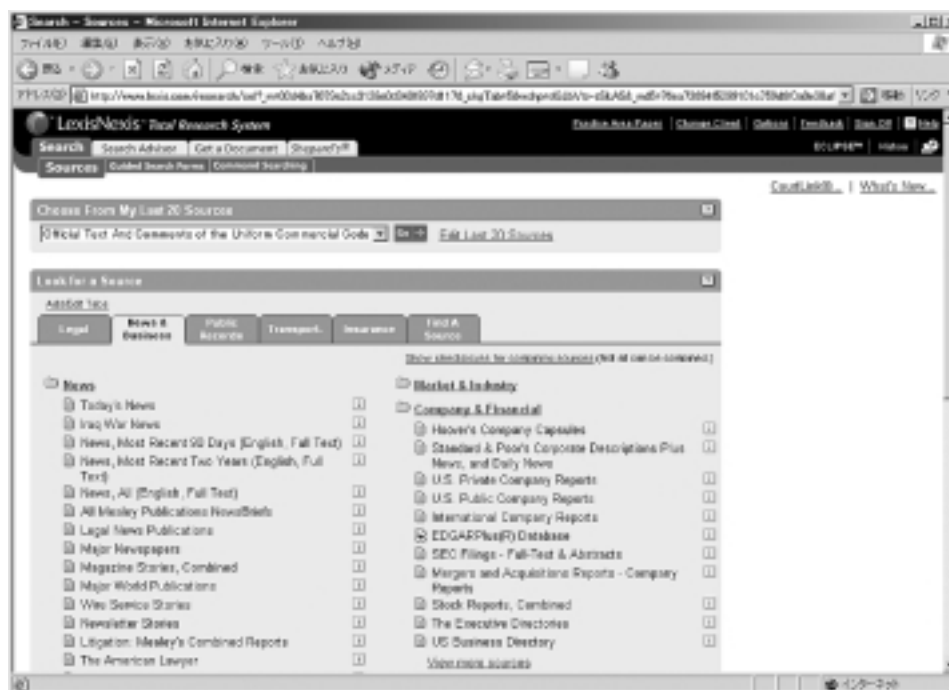
条文や訴訟番号、裁判の当事者名があらかじめわかっている場合、複雑なサーチは不要です。Get a Document Party Name, Citation, または Docket Number を選択し、当事者名やサイテーション、事件番号を入力するだけで、ご希望のドキュメントの全文をダイレクトに取り出すことができます。

・Shepard's® (引用文献・審級関係を検索)

判例の履歴と評価が視覚的に確認できるだけでなく、法令やローレビューなど二次資料も含めた総合的な引用関係調査が可能です。

(2) 次に新聞雑誌の検索に関して説明します。初期画面上部の "News & Business" のタブをクリックすると新聞雑誌のページが開きます。誌名別・テーマ別・言語別・地域別等のファイルがあり、必要部分をクリックして開き、検索を行います。

なおテーマ別ファイル中には、特許や医療保険といったホットなサブカテゴリーも含まれています。



Lexis.com の検索機能の詳細やダウンロード方法等については、下記オンライン・マニュアル (Lexis.com クイックリファレンス) をご参照下さい。

<http://www.lexisnexis.jp/support/lexisquickref.pdf>

図書館 (室) ニュース

「亀井文庫」から常設展

総合図書館では、12月から来年2月まで3階ホールで、所蔵コレクションの亀井文庫から19世紀の西洋美術関係資料を展示します。

亀井文庫は、旧津和野藩主亀井茲明(これあき)旧爵が留学先のドイツで収集した美術工芸資料のうちの書籍約2,000点で、関東大震災で所蔵を焼失した本学図書館に寄贈されたものです。

遡及入力平成 14 年度実績報告及び平成 15 年度計画

附属図書館 情報管理課

附属図書館では、教育特別経費による全学蔵書遡及入力事業を平成 7 年度から 10 年計画で実施しています。昨年度 8 ヶ年を経過した時点で 94 万冊の入力を終了しました。また、学内では、科学研究費等での遡及入力も行われており、その数をいれますと、141 万冊の入力を終了し、平成 15 年 3 月 31 日現在、全学で 3 227 679 件の図書の所蔵レコードが OPAC 並びに NACSIS Webcat でオンライン検索できます。

さらに、現代中国語図書の遡及入力も文部科学省から図書館高度化経費の配分を受け、平成 12 年度からの 3 ヶ年で 14 万冊の入力をしました。これにより、工学部建築学科、経済学部、社会情報研究所、総合図書館の現代中国書の遡及入力は完了しました。

今年度も昨年度同様「遡及入力によって自動貸出等の事務合理化が著しく進展する」部局を中心に法学部、医学部、文学部、経済学部、社会科学研究所、史料編さん所、先端科学技術研究センター、総合図書館で遡及入力を実施します。また、現代中国語図書の遡及入力は法学部、文学部、東洋文化研究所、社会科学研究所において実施します。

全学遡及入力状況（科学研究費等を含む）及び平成 15 年度予定

	平成 7 年度	8 年度	9 年度	10 年度	11 年度	12 年度	13 年度	14 年度	平成 7 年度 からの合計 (予定)	遡及入力 が必要な冊数 (平成 15 年度当初)	15 年度 予定冊数 (中国書含む)	15 年度 現代中国語 朝鮮韓国語 予定冊数
総合図書館	29,069	40,949	43,633	20,002	15,107	17,832	13,899	21,861	202,352	356,000	20,000	
法学部				9,232	10,433		6,186	29,849	55,700	258,000	17,200	7,200
法・法政資料センター										48,000		
医学部								8,494	8,494	60,000	10,000	
工学部								700	700	182,500	400	
文学部	9,340	9,008		7,000	14,205	27,390	26,396	69,177	162,516	380,000	28,000	7,200
理学部								3,134	3,134	65,000	3,500	
農学部						10,167		2,640	12,807	35,000	3,000	
経済学部	3,190	13,761	17,677	9,407	7,457	78,786	67,014	82,567	279,859	150,000	150,000	
教養学部	20,576	39,227		23,552	28,037	44,150	28,828		184,370	540,000		
アメリカ太平洋地域研究センター										60,000		
教育学部				40,731	48,000	3,597		1,500	93,828	2,000	700	
薬学部								2,339	2,339	1,000	1,000	
数理科学研究科						21,000	7,000	8,448	36,448	20,000	8,000	
情報理工学系								62		477	477	
医科学研究所										0		
地震研究所										0		
東洋文化研究所		7,311	18,389	17,175	19,549	10,971	7,829	30,000	111,224	50,000	30,000	24,300
社会科学研究所		10,143	26,339	23,762	26,627		12,227	12,803	111,901	44,000	14,500	4,500
社会情報研究所			11,637	13,327	14,107	13,368		200	52,639	1,000	500	
生産技術研究所										47,000		
史料編さん所			13,961	13,132	12,515	14,815	6,046	6,009	66,478	10,000	7,000	
分子細胞生物学研究所										0		
宇宙線研究所										0		
物性研究所				9,411					9,411	5,000		
海洋研究所								9,836	9,836	0		
先端科学技術研究センター								11,123	11,123	6,000	6,000	
総合研究博物館										4,090		
原子核研究所	2,117	1,026							3,143	0		
合計	64,292	121,425	131,636	186,731	196,037	242,076	175,425	300,742	1,418,364	2,325,067	300,277	38,700

1月～3月のデータベース定期講習会のお知らせ

文献調査のヒントが
いっぱい!!

- 学んで触れて探し出そう! -

情報基盤センター 学術情報リテラシー掛

会場：総合図書館 1階 メディアプラザ 講習会コーナー

定員：各回12名です。(予約は不要です。時間までに会場へ直接集合してください。)

コース名	内 容
入門コース 本/雑誌を探す	<ul style="list-style-type: none"> ・授業で指定された文献や参考文献リストに記載された文献の所在調査のテクニックを習得することを目的とします。 ・OPACなど基本的なデータベースを使った検索実習を中心とします。
実践コース(1) 文献データベース	<ul style="list-style-type: none"> ・雑誌記事索引データベースをはじめ、各専門分野の文献データベースの検索実習を中心に、文献調査方法と電子ジャーナルの利用について紹介します。
実践コース(2) 引用索引データベース (Web of Science)	<ul style="list-style-type: none"> ・引用索引データベース(Web of Science)の検索実習を中心に、文献調査方法と電子ジャーナルの利用について紹介します。
実践コース(3) 電子ジャーナル	<ul style="list-style-type: none"> ・東京大学で利用できる代表的な電子ジャーナルの利用方法について紹介すると共に、各種データベースを用いた文献検索の実践演習を行います。

New!

スケジュール (2004年1月～3月)

月	火	水	木	金
1 / 5 休館日	1 / 6	1 / 7 15:00 - 16:00 実践 (2)	1 / 8	1 / 9 11:00 - 12:00 実践 (3)
1 / 12 休日	1 / 13 11:00 - 12:00 入門	1 / 14	1 / 15 11:00 - 12:00 実践 (1)	1 / 16
1 / 19 11:00 - 12:00 実践 (2)	1 / 20	1 / 21 18:00 - 19:00 実践 (3)	1 / 22 休館日	1 / 23 15:00 - 16:00 実践 (1)
1 / 26	1 / 27 18:00 - 19:00 実践 (2)	1 / 28	1 / 29 15:00 - 16:00 実践 (3)	1 / 30
2 / 2 15:00 - 16:00 入門	2 / 3	2 / 4 11:00 - 12:00 実践 (1)	2 / 5	2 / 6 11:00 - 12:00 実践 (2)
2 / 9	2 / 10 11:00 - 12:00 実践 (3)	2 / 11 休日	2 / 12 15:00 - 16:00 実践 (1)	2 / 13
2 / 16 18:00 - 19:00 実践 (2)	2 / 17	2 / 18 15:00 - 16:00 実践 (3)	2 / 19	2 / 20 11:00 - 12:00 入門
2 / 23	2 / 24 15:00 - 16:00 実践 (2)	2 / 25 休館日	2 / 26 休館日	2 / 27 18:00 - 19:00 実践 (1)
3 / 1 11:00 - 12:00 実践 (3)	3 / 2	3 / 3 15:00 - 16:00 実践 (1)	3 / 4 11:00 - 12:00 実践 (2)	3 / 5
3 / 8	3 / 9 15:00 - 16:00 実践 (3)	3 / 10	3 / 11 18:00 - 19:00 入門	3 / 12
3 / 15 18:00 - 19:00 実践 (1)	3 / 16	3 / 17 18:00 - 19:00 実践 (2)	3 / 18	3 / 19 18:00 - 19:00 実践 (3)
3 / 22	3 / 23 11:00 - 12:00 実践 (1)	3 / 24	3 / 25 休館日	3 / 26 15:00 - 16:00 実践 (2)

(都合により開催日時を変更する場合があります。スケジュールはホームページ等でもご確認ください。)

ご都合の良い時間帯を選んでどうぞご参加ください。(11:00 - 12:00、15:00 - 16:00、18:00 - 19:00) ご要望に応じた内容で出張講習会もいたします。授業やゼミ単位でお申し込みください。

お問い合わせ先：情報基盤センター学術情報リテラシー掛 (内線 22649)

literacy @ lib.u-tokyo.ac.jp <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/koshukai>

PDF 版『図書館の窓』の公開について

附属図書館 館報編集委員会

本誌『図書館の窓』のPDF版が、2003年9月号（Vol.42, 4）より附属図書館ホームページから閲覧できるようになりました。今後目次機能を充実させて、バックナンバーを見易くしていく予定です。冊子版の配布も従来どおり続けていきますので、あわせてご利用ください。表示には Adobe Acrobat Reader や Adobe Reader 等（Adobe のサイト <http://www.adobe.co.jp/> からダウンロード可）が必要です。



PDF 版『図書館の窓』

（<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/kanpo/index.html> からご覧になれます）

また、Web版の広報である附属図書館ホームページ（<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>）では、図書館（室）のニュースや利用案内等、『図書館の窓』とはまた違った図書館の最新情報をご覧いただくことができます。東京大学オンライン目録データベースや各種データベース、電子ジャーナル等のゲートウェイとしても、ぜひご利用ください。

編集室だより

今年もあと少し。年度末試験、論文提出、学会の準備と追い込みを迎えていらっしゃる方も多いと思います。研究も学習もやりはじめると終わりのないもの。おのずと、図書館で過ごされる時間が長くなるかもしれません。そんな時、ちょっと一息。気分転換に本のブラウジングはいかがでしょうか？意外な発見ができるかもしれません。（松家）

*ブラウジング（browsing）とは…「書架上で本の背表紙を気の向くままにながめ読みしたり、特定の目的を持たずに本を手にとって中身を拾い読みしたりする行為。」（丸善『図書館情報学用語事典』より）

東京大学附属図書館報「図書館の窓」Vol. 42 No. 6（通巻 414 号）2003 年 12 月 1 日発行
 発行人 笹川郁夫 編集委員 委員長・内島秀樹 副委員長・松家久美 委員・谷 ゆき・坂牧一博・
 武居（滝澤）総子・小野澤さわ子・小山憲司・高橋 努
 東京大学附属図書館発行 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 電話 03（5841）2612